

---

# 七月の混沌

京根 彌生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

七月の混沌

### 【Nコード】

N1044V

### 【作者名】

京根 彌生

### 【あらすじ】

七月の、初夏が過ぎ去り気温はじりじりと暑くなり始める、そんな日。

この悲しいほどに蒸し暑い盆地、京都に住む日丘まり子は今時エアコンもない学校の教室でうつらうつらと夢を見ていた。

ああ、頭がぐわぐわする、全身の水分が抜け干からびていくようだ。夢の中だろうか、夢ではないのだろうか、そんな曖昧な境界で聞こえてくる、水の波音のような声。

「匣入り娘のりやせん輪廻<sup>めぐりね</sup>、抜け出せんとや匣入り娘。振り返つてはならぬぞと、ひょうひょう烏<sup>からす</sup>の<sup>が</sup>する。」

ああ、暑さで参ってしまったか。

そう思った瞬間に、廊下で大きな音がした。

## 匣（前書き）

この小説を真似て匣にはいる、または人を入れるなどの行為はおやめください。非常に危険です。

匣

>i28482<r u b y><r b>3650<

匣</r b><r p>(</r p><r t>はこ</r t><r p>)</r p></r u b y>というのは、俗に四角く方形の箱のことをいう。

決して人がはいるものではないし、ましてや異世界へ繋がるなど言語道断。まったくもってありえない話だ。

けれど、けれどもし、それが可能であるとしたら。私はどうすること望むのだろう。

まったくもってこの世間よのなかというものは、不思議なことだらけである。

夕火あぶりの刻 粘滑ねばらかなるトウヴ 遙場はるばにありて回儀まわりぐるまい錐穿きりつがつ  
総てのらしきはボロゴウヴ、かくて郷遠さととおしラースのうずめき叫なば  
ん。

「我が息子よ！ ジャバウオックに用心あれ！ 喰あらいつく顎あぎと、引き掴む鈎爪！

ジャブジャブ鳥にも心配るべし そして努ゆめ 燻り狂えるバンダー  
スナッチの傍に寄るべからず！」

ヴォーパルの剣けんぞ手に取りて 尾揃おそろしき物探すこと永きに渉れり  
憩う傍らにあるはタムタムの樹、物思いに耽りて足を休めぬ。

かくて暴なる思いに立ち止りしその折、両の眼を炯々（けいけい）  
と燃やしたるジャバウオック、

そよそよとタルジイの森移ろい抜けて、  
怒どめきずりつつもそこに迫り来たらん！

一、二！ 一、二！ 貫きて尚も貫く

ヴォーパルの剣が刻み刈り獲らん！

ジャバウオックからは命を、勇士へは首を。

彼は意気踏々（いきとうとう）たる凱旋のギャロップを踏む。

「さてもジャバウオックの討ち倒されしは真まことなりや？

我が腕かいなに来たれ、赤射せきしゃの男子おのこよ！

おお芳晴かんばらしき日よ！ 花柳かな！ 華麗かな！」

父は喜びにクスクスと鼻を鳴らせり。

夕火の刻 粘滑なるトーヴ 遙場はるかにありて回儀まがい錐穿つ。

総て弱ぼらしきはボロゴーヴ、かくて郷遠きょうえんしラーズのうずめき叫  
ばん。

ジャバウオックの詩 ルイス・キャロル作

「鏡の国のアリス」

より引用

## 匣入り娘

外から蝉の声が聞こえる、みんな、じーうじーうと鳴きだし、夏が来たのだと一生懸命に伝えていた。

一方の私は、この暑い中家にも帰らず、学校だって午前授業だというのにエアコンもないこの教室で、昼も取らずに自分の机でうなだれている。・・・やはり暑い。机が汗でべとついて気持ち悪い。だが、それでも帰る気にはなれない。

何故なら、まずこの机から立ち上がり、次に明日から夏休みにはいるため、置き勉強していた教科書を持って帰るため詰めた重い鞆をもつ、それまた次に教室より暑い外にでて、自転車に鞆をのせて、鞆のせいで重たくなってしまった自転車をこいで、家まで帰る。

だめだ、絶対に面倒くさい。しかもこの京都市立蓮ノ葉高校から私の自宅まで、自転車で十五分もかかる。坂道も多いため、労力はいつもの倍になるわけだ。

そんなことを考えて、うつすらと開けていた目をもう一度閉じる。瞼を閉じて見えたのは熱い暗闇で、さっきほど寝つける気はしなかった。さっきは夢を見るほど眠っていたというのに。

そう、先ほどまでは夢を見ていたのだ。自らがこの暑さで干からびていこうというのに、夢では水の波音というなんとも不思議な夢だ。

そしてその波音はしだいに小さな声という形にかたどられていき、最後は明確にこう唱えるのである。

「匣入り娘のめりやせん輪廻、抜け出せんとや匣入り娘。振り返ってはならぬぞと、ひょうひょう烏からすの声がする。」

何が匣入り娘なのだろうか、しかも、なぜか夢だというのに浮かんできたのは箱ではなく匣なのだ。私には箱も匣も同じに思える、だって結局は物をいれるための物なのだから。あの有名な作家の小説にでてきた小説「匣の中の娘」じゃあるまいし。

蝉の声が絶えず聞こえる、誰もいない教室で一人机に項垂れているのはじつに滑稽だな、としみじみ思った。

「何をしているんだい、日丘さん。」

唐突に、声が聞こえた。誰だろう、聞いたことのない声だ。ああ、それより体をはやく起こさなければ、見知らぬ誰かさんに失礼じゃないか。

うすらぼんやりした頭で考えて、むくりと私は体を起こした。目の前には我が校の制服、ストライプのベージュのスカート、女子だ。顔をあげて相手の顔を見れば、にこりと微笑まれた。

随分と、すつとしている、と感じた。

別にキツネ顔というわけじゃないが、黒髪で真ん中分けのショートボブのような髪型と切れ長だがはつきりとあいた目、これぞ笑みだ、と言わんばかりに微笑んでいる口元。美人か、と聞かれれば、普通、だが、何か異質なものを感ずる。

雰囲気だろうか、気配だろうか。彼女から滲み出る雰囲気は、高



校生というより、まるで老婆から少女までを足して、混ざりきらないままに押し出したような感じた。例えば、マーブルなアイスやパンより不完全で、湯銭でとけきらなかった刻んだチョコレートより完全な形だった。

・・・例えの話だが、別にお腹がすいているわけではない。食意地が張っているわけでもない。

「つまりはお腹が減っているんだね、飴、食べるかい？べっこう飴だけね。」

ぼーっと考えていたら、ひょいと飴を差し出された。短くきつた割り箸に大阪万博の太陽の塔みたいな顔をした平たいべっこう飴がついている。棒つきとは、珍しい。

と、いうより。

「人の心を読まないでいただきたい！」

私はにこにこ笑う彼女にそう言った。完璧に心を読まれた気がして恥ずかしくなった。

すると、彼女はにこにこ顔をさらに笑わせて、くすくすと笑った。

「読んでいないよ、そんな顔を君がしているから、お腹が減っているのかと思って。」

食べないのかい？と先ほどのべっこう飴を差し出してくる。何故か口出しができなくなり、私は押し黙ってしまった。無言でべっこう飴を受け取り、口に含んだ。

「やっぱりお腹が減っていたんだね、おいしいだろう？」

「・・・・・・・・あんだ、誰？」

聞いてくる彼女の質問を無視し、私は彼女の名前を聞いた。彼女は私のことを知っているようだが、あいにくクラスの生徒の名前すら覚える気のない私は、彼女の存在など気にしたこともなかった。

私に問いかけられて、彼女は、それはもう優しげに、少女のように、孫に微笑む老婆のように、彼女は微笑んで言った。

「名無しの権兵衛。こんべさん、って呼んでね。」

なんの冗談だろう。あれだけにこにこと好意的にしておきながら、名前を教える気はないのか。

それでもこにこと笑う彼女を前に、私は露骨に訝しげな顔をしてしまった。

蝉の声が聞こえる。みんみんじーうじーう、けたたましく鳴いていた。

ひゅー、と教室に風が吹き抜ける。

がっしゃーんっ！！

「!？」

廊下のほうで何か大きな物音がした。うすらぼんやりしていた頭がはつきりと覚醒する。

あわてて机から立ち上がり、教室の後ろの扉を開けた。踏み出そうとした足元に転がるのはプリント類、

その奥には我が校の生徒であろう男子が盛大に転んでいた。

「ちよっ・・・！大丈夫ですか!？」

-

-

「っ？」

ふいに、耳元で誰かの声がした。こんなときにささやいている場合か！と思い、後ろを振り返ったが、誰もいなかった。こんべさんすらも、いなかったのである。

蝉の音がする。

私は頭を二、三回ふって転んでいる男子に近づいた。

## 悪い先輩

「悪いね、手伝わせてしまつて。」

相変わらず蝉が鳴いている。それはやはりけたたましく、若干耳障りだった。

そして結局、私は先ほど盛大にこけていた男子と、両手に大量のプリントを抱えながら廊下を歩いていった。

「かまいません。あれだけ盛大にこけているのに、スルーするってのも悪いですし。」

そう言つて自分の持つているプリントをよいしょ、と抱えなおす。抱えているプリントは段ボールに入れられているのと合わせて、私の腰から肩までである。

これとその男子が持つている、やはり大量のプリントを一人で持つていたとは、重さといいバランスといい、よほど怪力なのだろう。この男は。私は男をまじまじと見つめた。男はそんな私の視線など気にしていないのか、前を見据えている。

（しかしこの男、どこかで見覚えがある。）

誰もいない廊下で横に並んで歩く男の顔を見て、私はどこか違和感を覚えた。

そもそも、私が男の顔を覚えるなんてことが珍しいのだ。いくらこの男が眉目秀麗だからといって、そんな簡単に、関わり合いのない男の顔など、私は憶えない。憶えていないはずだ。第一に、こういうことを憶えるのは私ではなく、私の友達で一番面喰いな渚の役目なのだ……、ん？渚？

その時、私は自身の友達が何か、たしか二ヶ月ほど前、誰かを見て騒いでいたことを思い出す。

「ねえ！まり子！見てよあれ！」

私の友達、園生<sup>そのえ なぎさ</sup> 渚<sup>なぎさ</sup>が窓の外を指して何か騒いでいる。そのときは丁度昼休みで飯を食べ終わったときで、自分の席の背もたれにもたれかかっていた私は気怠い体を起こして渚の方を見た。渚は何か興奮している様子で、手招きしながら窓の外を指差していた。

「なんだ、また紺野先輩か・・・？なあ、前にも言ったが俺はあんまりああいうチャライ男には興味は・・・」

俺、とは話しているとたまに出てしまう中学時代の私の一人称だ。<sup>ひとりな</sup>今は私、でだいたい話しているが、渚と話しているとなついつい昔の癖がでてしまう。昔から、私が“男より男らしい女”といわれる由縁が、これでもある。（まあ、半分は古風な考え方と話し方と性格から来ているんだろうけれど）

立ち上がったのそのそと渚に近づくと、渚はぶんぶんと首を振って、ぴよんぴよんとはねて窓の外を見た。

「違うよ！紺野先輩なんかよりもっとレアだよ！ほら、渡り廊下の方！」

（なんかって、この前キヤーキヤーはしゃいでたくせに。ミィハィなやつめ。）

そう内心で悪態をついて私は窓の外をみた。五月中旬でさんさん

と差す日光が少しばかり暑かった。

そう、その時だ。私がこの男を見たのは。窓の外、渡り廊下のところ、こいつは女子に告白されていたのだ。

男は後ろ姿で、その前に立つ女子の顔がよく見えたのを憶えている。女はいかにもチャラそうで、髪も巻いて、スカートを短くして、喋ればきんきん頭に響く甘えた声で、まだ若くハリのある肌に化粧を施した、いわゆる“姫系”の女だった。私はああいう女が苦手なのでよく憶えている、人間、自分の嫌なことはよく憶えているものだ。

その顔が、泣きそうに歪められていたのを思い出す。たぶん、自分が生きてきたなかで人生初めての告白だったのだろう。今までは告白されてきたか、成行きで付き合ってきたんだろうと思う。まあ、もちろんこれは私の、いままでそういう奴を見てきたうえでの偏見だが。

そして、それは断られた。女はまるで、理解できない、冗談でしょ？、みたいな顔をした。まあ、いままでフラれた経験がなく、それだけ着飾っていればそうなるものなのだろう。私は告白されたこともなければ、しようと思うことさえない。むしろ人間にあまり興味がないのだ、くだらない、とまでは思わないが、色恋沙汰には全く興味さえない。

「告白か。ありゃフラれたな。お気の毒に。」

「まり子、ぜんっぜん気持ちが悪くもってないよ、むしろ目があの女を蔑んでるよ。」

当たり前だ、人の告白シーンを見て感想など出てこない。むしろよくそこまで着飾れたものだ、ごてごてと面の皮を厚くして、見目みてくれ

だけをよくする女などに同情などしない。そんな奴に、私はよく思うことがある、見目を必要以上に飾る人間は、決まって中身がない。あつたとしても、見目麗しくなくとも輝いている人間にくらべれば、そんな中身は薄っぺらいものだ。

これはあくまでも私の持論だが、時折「あんなブスな子より私のほうが可愛い」なんていう女がいる、これは中身がなってない証拠だと私は思う。そうして人を卑下するから、輝きがなくなっていくんだ。僻んで、憎んで、そうするから君はその人に好かれなかった、そう言いたくなる時がある。

相手が自分より中身がよかった、そう思えば相手をみて自分を变えればいいだけなのに、と私は思うのだけれど。

そう、ぼんやりと考えながら二人を見てみると、女の顔がより一層くしゃっと歪み、走り去っていった。ああ、あれは何か男に言われたな、と私は感じ取った。

「あーあ、やっぱりフラれたね、あの女。<sup>ひと</sup>可哀相に。」

渚が先を見越しているように言った。

「やっぱり、ってことは、毎回恒例なのか。あれ。」

私は渚に聞いた。

「うん。今まで千石先輩<sup>せんごく</sup>に告白して成功した人、いないよ。むしろ返り討ちにあってるって。」

「返り討ち？」

なんだそれは。さっきみたいに泣いて帰るってことか。というか

返り討ちの使い方間違つてないか、それ。

渚は私の問いに千石という男を見て、解説しだした。

「えっとね、まず告白するでしょ。するとまずこう言われるんだって。」

「君、中身薄いね、って。」

渚はあの男の真似、なのだろう。とりあえず真似をして、私を指さす。

「そしてその次に、どうして僕を好きになるんだ。って聞かれるの。」

「んで、その理由を答える。」

それを説明して、ここからがすごいの。といまだに外で突っ立っている千石をさす。

「するとね、その答えの抜けているところ、つまりは論理的に説明できていないところをどんどん突き刺していくの。」

「しまいには告白してきた子の普段の言動から見た目から性格から、強烈にダメだししていくの。すごいでしょ？」

すごい、というか、えらく野暮ったい、というか、これはおそろくだけれど、

「それで最後の最後に、“あいにくだが、君のような子には興味がない” って言われるんだって。」



「そのせいで、先輩は“弾丸論破”<sup>だんがんろんぱ</sup>だの“某医大からでてきたロジカルモンスター”なんて言われてるんだよ。」

あの男は、私と同じように、人間に興味がないのかもしれない。  
あだ名のセンスがどうもパロディーなのが気になるが、私は渚に  
ふうん、と相槌をうった。

その時、外にいた千石がくりとこちらに振り返った。  
眉目秀麗、まさにそんな顔に浮かんでいたのは、どこか拗ねたよ  
うな、退屈そうな顔だった。

「千石<sup>せんごく</sup> 三条<sup>さんじょう</sup>。高校二年にして、蓮高<sup>はすこう</sup>のオデュッセウス。」

渚が目を輝かせて呟く。ちらりとそちらを見てやはり面食いなん  
だな、と軽い溜息を吐いた。

オデュッセウス、ギリシャ神話に出てくる一番の智将だ。トロイ  
ア戦争で数々の戦功をたてたことで有名である。

私はいつの間にかいなくなっていた千石のいた場所をぼんやりと  
見つめて再度溜息を吐いた。

## 本性

そうだ、こいつは千石三条だ。ロジカルモンスターだかオデュッセウスだか知らないがこの学校で最も有名な男ではないか。

見憶えがある以前に、この学校で千石といえば三条と帰ってくるほどに有名な男ではないか・・・！

千石三条、この学校の首席にして文武両道、成績優秀、博識で蓮高のオデュッセウス。彼の前では教師でさえも赤子同然。<sup>ややこ</sup>あつという間に言葉でねじ伏せられてしまう。

外見で言えば誰もが認める眉目秀丽、イケメン、美男子であり、日本人ではありえない地毛で銀なのか金なのかクリームというのか、そう、小麦色というべきか、そんな髪色をして、モデル並のルックス。スタイル抜群、本当に高校生なのか目を疑いたくなる容姿をしている。

性格はいわゆる好青年らしい。紳士的だ、と言われているが告白の件ではそんなところは見受けられなかった。上辺だけ、という線が濃厚だろう。

(くそっ・・・！)

こんな時ばかりは自分の人間に対する関心のなさが恨めしい。こいつに関わると危険だ、と私の人間探知センサーが避難警告の警報を鳴らしている。なんとしてもこいつから早く逃れなければ・・・！  
ちらりと横目で千石を見れば、奴は相変わらず前を見据えていた。

しばらく歩いて、ぴたりと足が止まる。教室の札を見れば図書室だった

「ここだよ。」

そう言つて、千石は図書室の引き戸を引いて、中に入つていった。しばらくするとまた出てきて、私の持つているプリントを受けとろうとした。

ばちっ！

「痛っ！！」

「っ……！！」

その時だつた、私と千石の手が触れるか触れないかの間で触れあつた瞬間、静電気のような、けれど目の前が白くなるような閃光が走つた。びりびりと体に電気がはしる、あまりの衝撃に足元がふらついた。千石もそれは同じようであざい顔をしていたが、私の見間違いだらうか、一瞬、一瞬だけ。

千石はにやりと口元をつりあげて、笑つた気がした。

(……?)

「大丈夫かい？」

目の前の千石ちいしと、先ほどの電気に妙な違和感を覚えていると、千石がこちらを心配そうに見つめていた。ああ、やはりさっきの見間違いなのだと、千石の顔を見て思った。

「大丈夫です。たかだか静電気ですし。」

この蒸し暑い夏に静電気なんて、おかしい話だが、それ以外に電気がおきる原因はここにはない。きっとプリントと制服が擦れあつて静電気をおこせたんだろう。それくらいしか、私の頭に浮かんだ消せない違和感には対処できなかった。

そうして千石にプリントを渡す。千石はプリントを再び中へ持つていった。

（よし！逃げるなら今だ・・・！）

チャンスを逃さぬようにして私は迅速にくるりと体を反転させた、そして足を一步踏み出す。正確には踏み出そうとした。

「ちょっと待っててくれるかい、手伝ってくれたお礼がしたいんだ。」

そんな声と共に肩を、遠慮なしにがっちりつかまれる。決してお礼がしたいという奴の力ではなかった、むしろ“逃げれば命はない”と力で言われている気がした。

ああ、逃げるのはやめよう。そう力を抜いて落胆するしかなかった。

七月二十日 午後二時

何があつてこうなったのか、どうしてこうなってしまったのか、私が聞きたいくらい残念な状況に、私は陥っていた。相変わらず猛暑で日はさんと差し、蝉はうるさく、じーうじーうと鳴いてい

た。

今現在、私の隣には自分の自転車を手で押している千石三条がいた。必然的に、私も自転車を押して歩いている。悲しいかな、私は千石にお礼と名うった散歩に付き合わされていた。

「へえ、じゃあ日丘さんは僕を知っていたわけだ。」

千石は照れたように笑う。何故だろう、異常に憎たらしく見えてしまうのは。暑さにいら立っているせいだろうか。

「ええ、まあ。不可抗力で。」

やんわりと返事をする。くそう、帰り道からどんどん外れていくというかここどこだよ。上鳥羽からも吉祥院からも外れていつているんではないだろうか。

私の通う蓮高は、全部で四つの区域から構成されている。そこから行きたい高校あてもなく、一般の公立を受ける生徒が集まるため、結構なマンモス校で有名な学校だ。

その四つのうち一つは上鳥羽かみとば、四つの中でもっとも何もなく、田舎でもなく都会でもない、テレビが来たら何を報道するか迷うくらい何もないところである。ちなみに私はここに住んでいる、何もないが、生徒の性格はいいほうだ。

二つ目は吉祥院きつじょういん。ここはある程度都会であると私は思っている。だが大通りから外れてみればどこよりも入り組んでおり、見た目だけ、と思うこともある。ちなみに生徒の態度は一番ここが悪い、不良が多いことで四区の中で有名だ。

三つ目は祥栄しょうえい。ここは市街地で、見た目もよく今時の学校だ。あまり特徴はないが、ここまできると西京極のあたりに入ってくる。

区域で言えばここが一番遠いのかも知れない。

四つ目は祥豊<sup>しやうほう</sup>。ここはたしかもとと祥栄と同じ区だったが、小学校の関係で祥栄と祥豊とに別れてできた区だ。だから一番新しく、やはり市街地で、特筆するところがないくらい普通である。

閑話休題。

いい加減意識を別のことに飛ばすのはよそう。私は千石の言葉に再び耳を傾けた。

「ん？それじゃまるで知りたくなかったみたいに聞こえるよ？」

分かってんじゃねえかこのロジカル野郎！むしろ今からでもできるならさようならしたいわ！

ちなみに一つ言っておこう、私は誰しもが認める毒舌で、罵詈雑言はお手の物なタイプである。つまり、口だけは回るタイプなのだ、決してツツコミだとかそんな関西的なノリではない。

私は千石の言葉に乾いた笑いを返した。

そんな会話を繰り返しているうちにどんどんと町から離れていく。私が気づいたとき、すでにまわりは帰り道とは程遠く、木々があり遠くには高速道路が見え、ふと見れば山が近かった。

「あの、ここどこなんですk」「あ、ついたよ。」

本当にここが自分の町なのか、不安になって千石に聞いてみれば、言い終わらないうちに千石が“到着<sup>ついで</sup>した”と言った。けれど、まわりには何も、ない。

「え？」

はずだった。この先に行けば山があつて、その先へ抜けるトンネルは封鎖されているはず。

けれど目の前にはえらく古い、アーチ型の看板があつて、そこには“京極京商店街”と書かれていた。

京極京・・・？私は聞いたこともない地名に首をかしげた。京極、など西京極しか私は聞いたことがない。ましてやこの区域にこんなアーチの立つような商店街なんてなかったはず・・・。

「この先にね、面白いところがあるんだ。」

そう言つて千石は、商店街の中に躊躇なく足を進めた。何度も来たことがある口ぶりだった。

「ちよつ、先輩！置いてかないでくださいよ！」

私は、この場に一人にされるのが怖くて、相変わらず先に進む先輩のあとを追いかけた。先輩は、私の声に立ち止つてはくれたものの、振り向きはしなかった。

けれど、私はこのとき、気づきもしなかった。当たり前だ、私が見ていたのは彼の後姿。

前では、あの図書室のときのように笑っているなどと、思いもしなかった。

## 奇妙な昭和男

もくもくと黙って先輩の後ろを歩く。先輩は相変わらず前を向いたまま、黙って商店街を歩き続けた。

私の体の中を表現できない不快感と嫌悪感がはしる。

どうしたんだろう、この腹からまるで蛆がわいてでてくるような感覚は。神経が研ぎ澄まされ、恐ろしいほど無音なこの商店街の中で、自分と千石以外から発する音を聞き出そうとしている。

じわり、と汗が噴き出る感覚がする、けれど汗の感覚はない。足が震えて、前に足がでない。自転車のハンドルを握る手が緩む。吐き気がして、私はその場にしゃがみこんだ。

がしゃっ、

「はあっ……！あ、ぐう……、うえっ……」

目の前がゆがむ、涙か、頭か、脳震盪でも起こしたか。目前に広がるタイルに水滴が落ちるのがぼんやりと見えた。

だんだんと息が苦しくなる、咽喉がしめられていく感覚がする。くるしい。あたまがぶれていく、一瞬何か、ぶれたなかに何かが見えた。

なんだろう、なにか酷く懐かしい。この商店街も、さっきの山道も、この感覚も。

何か、なにか思い出せそうなんだけれど、それが何か、わからない。

ぐらぐらと回る脳髓に髪をぐしゃぐしゃとかき回す。咽喉が苦し



くてたまらないはずなのに、奇声をあげようとして私は口を大きく開けた。

「落ち着け。」

耳に入っただのは、いやにトーンの低い千石の声だった。私は顔をあげて声のする方を向いた。数歩離れた先に、やはり後ろ姿の先輩が見えた。けれど、その雰囲気、静けさをまとっている。

「落ち着いて、目を閉じる。そしてゆっくり思いだせ。」

私は先輩の声に従い、ゆっくりと目を閉じた。そして、息を落ち着かせるように、閉じた咽喉で大きく息を吸った。

「西暦八百二年、七月二十日。お前はここで死んだ。」

息がぴたりととまる。

大量に吸い込んだ酸素をすべて使い果たすように、私の頭の中で走馬灯がはしった。

袴で走る私、いや、私に似た女。追いかけてくる、あれは鬼？いや、般若の面だ。般若の面の人間。走っているのは、先ほどの山道だ、周りは田んぼだけれど、山の風景はそのまま残っている。だけれど、その先は行き止まり、獣道すらない。女は横道にそれで、叢の中をすすむ。葦の平原だったのか、下は沼。女は足をばたつかせるがなかなか進まない。般若はすすいと進んでくる。

ああ、あんなにも速い、このままでは女は、私は、殺されてしま

う。

あと少し、後ろから般若が手を伸ばす。それは女の首にまわりつき、力強くつかんだ。女がもがく、けれど般若が首をつかんだまま女を上へと持ち上げた。きりきりと首がしまる、女の爪が、般若の首を絞める手に突き刺さり、がりがりと引っ掻いた。

「匣之娘、捕えたり。」

般若が呟いた瞬間、女の手はだらりと力なく垂れた。

ぐちゃり、と女の体が泥の中へ落ちる。袴に泥がしみつき、女の顔は青白い。

般若の面から、黒い髪がたれる、ストレートの、真ん中に割れ髪しゅるしゅると般若の角が縮み、怒りの形相が普通の人間の顔に戻った。あれは、面じゃなかったのか。

しかし、見覚えのある顔だ。随分と、すっとしている。

「……っ!!!!!!はあっ……!!」

そこで走馬灯が途切れた。途端に空気が咽喉に通る、肺に満ちた。大きく息を吐いて、かっと思をこじ開けた。

「思い出したか？随分と、怖い思いをしたらしいな。」

千石が、やはり後ろ姿のまま、ピクリとも動かず話す。私は訳が分からず、息を整えてゆっくりと立ち上がった。同じように自転車を立て直す。

「行こう、もうすぐだ。おいで。」

先輩は、初めて私を誘い込み、私はそれに引き寄せられるようについて行った。

びた、と先輩の足が止まる。次にくるりと右を向いた。

私もそれに従い、右を向いた。見た目からすると、駄菓子屋だろ  
うか。古本屋にも見えるが、中にはきらきらした飴がたくさん入っ  
た蓋付きのガラス瓶や十円ガムがはいった箱、当たり札などが所狭  
しと並んでいる。今にも八十を超えた丸眼鏡をかけたお婆ちゃんが  
出てきそうだ。だが、戸はしまっており、前には「田植え休み」と  
いうお札が貼られている。その上には看板があつて「座天弁」とふ  
わふわしたような、けれど硬い字で書かれていた。

「べん・・・てん・・・ざ・・・？」

変わった名だ。普通、座、なんていうのは何かを観戦とか鑑賞す  
るための場所につけるものだと思うていたけれど。

先ほどのこともあり呆然としていると、先輩ががたと戸を開  
け始めた。立てつけが悪いのか、無理に動かすと今にも戸が外れそ  
うだった。私も慌てて自転車のスタンドを下した。

がたがたがた、がたんっ！

少々乱暴に先輩は引き戸を開けた。そしてずかずかと上り込む、  
休みなのに。

「おい！ 鵠めえ！」

「うるさっ・・・！」

そして大声を上げた、人の家なのに。耳にびりびりと響く声で先

輩は誰かを呼ぶ。ぬえ、なんて珍しい名前だ。

「はいはい、そないに呼ばんとしても、聞こえとりますよ。」

そんな先輩の無礼な声に、まるでマイクで喋っているような優しい声が聞こえた。どうやら奥に見える急な階段から上った二階にいるらしい。よく通る声だ。

「上がったいで」

続いて声がそう誘うと、先輩は後ろにいた私のほうを向く。私はその視線の意味が分からず、その眼を見返した。

「何してる、速く行け。」

「え。ええええ……！ここ仮にもよそ様の家ですよせんば」  
「いから行け」……はい。」

さつきから思っていたが、先輩の口調がなんとなく荒い。そして最初から人の話を聞かない。

言葉を遮られたのはこれで二回目だ。

私は先輩の鋭利すぎる視線にすごすごと靴を脱いで上がる。ぎし、と古い床が軋んだ。

「お邪魔します。」

「はいよー、」

また上から声が聞こえる。耳がいいのだろうか、ボソツと呟いた

だけだったのに。

「早く行け。」

分かってるわ！このハツタリ野郎！何が紳士的だ！見せかけじゃないか！

後ろから聞こえた先輩の声に心の中で悪態をついて私は物と物の隙間に見える階段を上った。急だ、立って上るとこけそうなので猫のように上った。

上りきって人が一人丁度立てるかぐらいの踊り場に立つ。だが、上りきったはいいが、それから部屋に行く扉が見当たらない。左右と前は壁だった。

（どうやって部屋に行くんだ・・・？）

階段上って壁なんて、直面したことのない場所に困惑していると、前の壁の向こうから通った声が再び聞こえた。

「あ、足足。足元見て。」

「え？」

足元、と言われて足元、の少し手前、前の壁の下らへんに、人が一人四つん這いになってやっと入れるような、小さな戸があった。まるで茶室のように。

「そこからはいるんだよ。」

「え、あ、はい。」

声に先導されてその引き戸を開ける。もぞもぞと入り込めば、室内は外が夏だというのに、まるで湿った森にいるような肌寒さだった。そして薄暗く、明かりといえば部屋の奥にぼつり、とろろそくが焚かれているだけだった。

「よ、っこい、せ！」

やっと体を半分通したところで、室内を見回せば、大量の本が部屋をぐるっと囲むように、天井高くまでつまれていた。崩れ落ちてきたら、確実に逃れられない。

そして薄暗くて顔は見えないが、人が一人なにか、桐箱だろうか。縦長の桐箱を抱えた人がいた。そして、手元を見れば銀色に輝く髪元をたどれば、どうやらその人から続いているようだ。

「さっさといれ！」

どがつ！

「いってえっ！」

急に後ろから先輩の声が聞こえたと思えば、私の尻に激痛がはしる。

あいつ……！女のケツ蹴りやがった……！なんの戸惑いもなく蹴りやがった……！

私はその衝撃で部屋に転がりこみ、自分の尻を抑えてもだえる。じんじんと鈍い痛みがまだはしっていた。

「てめえっ！何しやる！さっきから先輩だからって甘くみてりや

調子のりやがつて・・・！」

「ふん、威勢がいいこった。」

私は屈んで部屋に入ってくる先輩をにらみつけて怒声をあげる。先輩はそんな言葉に買いい言葉を鼻で笑って返して、その場にどかと座り込んだ。

「こらこら、女の子を蹴るもんじゃないがし。変な性癖にも思えるよ？」

鵜と呼ばれた人だろうか、その人が仲裁にはいる。優しくよく通る声は、私の怒りを鎮めてもこの尻の痛みは鎮めてはくれなかった。

「人に変な性癖をつけるな、鵜。せっかく匣娘はじめを見つけてきてやったのに。」

先輩はしれつとした顔で、相変わらず前を見据えて言った。はこめ、が何かはわからなかったが、私のことを指している、ということとは分かった。

「おやおや、それはご苦労さんでした。どうせあんさんのことやし、無理やり連れてきたんやろうとおもうけど。」

鵜はそう言って私のほうを見る。私は目が慣れてきたのか、ようやく鵜の顔を確認できた。そして先輩が実は結構乱暴でしたたかな性格だということも分かった。分かりたくはなかったけれど。

「いらっしやい、ようこそ弁天座へ。店主の鵜です。」

鵒は首を傾けて、さらりと銀の長く無造作に伸ばした髪を揺らし  
て、実に人懐っこい笑みを浮かべた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1044v/>

---

七月の混沌

2011年8月2日03時29分発行